11 月第 3 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 11 月 19 日（日）10：30－11：30　降誕前第 6 主日
■説　教：　保科けい子牧師
■説教題：「　永遠の命に至る食べ物　」
■聖　書　新約：ヨハネによる福音書 6 章 27～35 節（新約 p175）
■讃美歌：6「　つくり主を賛美します　」
　　56「　主よ、いのちのパンをさき、　」

11月5日の召天者記念礼拝の時にヨハネによる福音書3章16節の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」という御言葉を取り上げながら、「永遠の命」という言葉は、ヨハネによる福音書では17回も用いられているということをお話ししました。ほかの三つの福音書に比べてとても多いので、ヨハネによる福音書は「永遠の命の福音書」と呼ばれることもあるということもお話ししました。その時の聖書箇所も本日の聖書箇所も、日本基督教団の聖書日課から取り上げていますので、関連があるのです。そして、間に挟まれている先週11月12日（日）の聖書日課は、新約聖書の中の書簡としてローマの信徒への手紙 4 章13節から25節が示されていましたので、私はその箇所を選びました。しかし、福音書として示されていたのはヨハネによる福音書の8章51節から59節でした。その中の58節に「イエスは言われた。『はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、「わたしはある。」』」と記されています。その「わたしはある」という言葉が、本日の箇所ヨハネによる福音書の 6 章35節「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。」の元の言葉で用いられているのです。それは、主イエス・キリストご自身の本質を表し、主イエスこそ真の主なる神であることを示す言葉です。そして、ヨハネによる福音書で語られる「永遠の命」とは、17章3節で主イエスの祈りの言葉として「永遠の命とは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」と記されています。私たちが「永遠の命」という言葉から漠然と思いめぐらしている天国での在り方や不老不死などといったものとは、異なることを覚えておきたいと思います。

さて、本日の聖書箇所の35節の主イエスの自己紹介にあたる「**わたしが命のパンである。**」という言葉は、元のギリシャ語では「エゴー　エイミ」という表現で始まっており、英語でいえば「アイ　アム」です。これは、旧約聖書の出エジプト記3章14節で、モーセが主なる神様から「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣

わされたのだと。」と、神様の名前を示されたことにつながっています。つまり、主イエスとは何者であるか、というヨハネによる福音書の中心的な主題が本日の箇所には出てきているのです。注意深くヨハネによる福音書を読みますと、11章25節で「**わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない**」、14章6節で「**わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のみもとに行くことができない**」などと、「命」という言葉と関連する表現が続いています。

また、ヨハネによる福音書では、主イエスのなさった奇跡が「しるし」と呼ばれています。それは、その奇跡が主イエスこそが父なる神から使わされた独り子なる神であられることのしるしであると考えられているのです。しかしそれは、その奇跡を見たりあるいは体験したりした人々が、主イエスこそ神の子であり救い主であるという信仰を持つようになることによってこそ、「しるし」として受け止められたことになるのです。ところが、本日の箇所で「あなたがた」と記されている群衆が期待しているのは、主イエスがなさったパンをおよそ５千人に分け与えるという場面に居合わせて、パンがとてつもなく増えてそれを食べて満腹したという体験をして驚き、このイエスという男の後についていけば何か良いことが起こるのではないか、という非常に現実的な利益を求めてのものと言えるでしょう。つまり、彼らにとってこの奇跡は、主イエスを神の子と信じて従っていく、という信仰をもたらす「しるし」にはなっていないのです。それを主イエスは本日の箇所の直前の6章26節で「はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」と鋭く見抜いておられるのです。そして、続く27節で、「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである」とお語りになっています。言い換えれば、「あなたがたが求めているのは『朽ちる食べ物』だ。しかし私があなたがたに与えようとしているのは、『朽ちない食べ物』、すなわち、『いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物』なのだ、それをこそ求めなさい。」、と主イエスは言われたのです。そのようにして、この第６章の中心となる主題が示されました。ひるがえって、私たちはその「食べ物」を本当に求めているでしょうか。深く問われるところです。

繰り返しますが、主イエスは「永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」と言われた、と聖書は語っています。しかし、群衆は何のことかわからず問い直します。かつてイスラエルの民は、モーセに導かれてエジプトを脱出し荒野を旅して約束の地へ向かいましたが、食べ物が無くなった時、神様は民に「マナ」と呼ばれる食べ物を与えられました。ですから、そのことを思い

出した群衆は「そのパンを私たちに下さるのですか」と主イエスに問いかけたのです。それに対して、主イエスは6章32節33節で答えられます。「モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、私の父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」と。それは言い換えれば、「あなた方の先祖にパンを与えたのはモーセではなく、父なる神だ。そして今、神はマナに勝るパンをあなた方に与えようとしておられる」ということでしょう。空腹であった群衆は、その言葉を主イエスがマナに代るパンを与えると約束してくれたと勘違いしたのです。主イエスが彼らの勘違いを訂正して語られたのが「私が命のパンである。私のもとに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決して渇くことがない。」という御言葉でした。群衆が求めたのは見えるパン、つまりその日の命をつなぐための目に見える具体的な糧だったのに、主イエスが与えようとされているのは見えないパン、つまり霊の糧です。私たちもまた、祈り願うことの多くは目に見える具体的な事柄が多いのではないでしょうか。しかし、「私が命のパンである。」という言葉を元のギリシャ語で見ると「エゴーエイミ（私は・・・である)、ホ・アルトス（そのパン)、テ・ゾーエー（命の)」と記されています。問題にされている命は「ゾーエー」としての命です。ゾーエーは魂としての命、人格的な命を指します。私はこの御言葉「エゴーエイミ」を読むときにいつでも、今ここに主なる神様が顕現されている、言い換えれば私たちに親しく臨んでくださっているということを実感させられます。ですから、今ささげている私たちの礼拝でも、この御言葉を共に聞くときに、主なる神様が私たちに親しく臨んでくださっているということを確信するのです。私は、そのことこそが私たちが共に与る「永遠の命に至る食べ物」である、と確信しています。だからこそ、私たちはこのようにして、礼拝に集っているのです。